



ガンちゃんのお星さま

『ガンちゃんのお星さま』

今年もまた、クリスマスの季節がやってきました。

孤児院の子供たちは、庭に生えている大きなもみの木に、自分たちで作ったいろいろな飾りを、つり下げ始めました。

クリスマスツリーを飾りつけながら、瞳を宝石のようにキラキラ輝かせる子供たち。

その様子を、一台のロボットがながめていました。

彼の名前は、ガンちゃん。

たたくとガンガン音がするからと、子供たちがつけた名前です。

顔も身体も四角ばっている彼は、もともと大きな工場で働くロボットでした。

ずっと長いこと一生懸命に働いていたので、身体の内側がポンコツになってしまい、数年前に工場をお払い箱となりました。

そして、子供の遊び相手にどうだろうか、この孤児院に寄付されたのです。

「ガンちゃん、これあの枝につけてくれる？」

小さい女の子が、折り紙で作ったお星さまを手にしています。

ガンちゃんはお星さまを受け取ると、もみの木の下から、高い所にある枝を見あげました。

「アノエダノ サキデ イイノカナ？」

「うん」

ガンちゃんの脚が、バネのようにググーンと伸びます。

あっと言う間に、目当ての枝に飾りをつり下げてしまいました。

「コレデ イイ？」

「ありがとう！ ガンちゃん！」

女の子はガンちゃんの角ばった頬に、チュッと唇をあてました。

「ドウ イタシマシテ」

このクリスマスツリーには、お星さまや長靴、サンタさんやトナカイなどが、たくさんぶら下がっていました。

その他に、子供たちが大好きな人形や車なども、中には、バレリーナや宇宙飛行士など、自分の将来の憧れを飾る子もいました。

毎年こうやって、子供たちのいっぱいの夢で出来あがっていくクリスマスツリーが、ガンちゃんは大好きでした。

急に子供たちの歓声があがりました。

どうしたのでしょうか？

みんな、あわてて走って行きます。

見る間に、庭の片すみに子供たちの輪が出来あがりました。

見ると、その真ん中には、真新しいロボットが立っています。

ピカピカの銀色に輝くスマートなそのボディは、きっと最新型に違いありません。

その横では、孤児たちのお父さんがわりでもある院長先生が、この新しいロボットについて説明を始めました。

「あるお金持ちの方から頂いた、ロボットのジェットくんです。みんな、仲良くするんですよ」

そのロボットは、足の裏からジェット噴射して飛びあがると、クルリと宙返りして見せました。

「ジェットです。よろしくね」

なめらかに話すことが出来て、空を自由に飛べるピカピカのジェットくんに、子供たちは大興奮です。

あっという間に、ジェットくんは人気者になりました。

それを輪の外からながめていたガンちゃんは、自分の身体を見ました。

どこにも光っている部分はありません。

あちらこちらがボコボコとへこんでいて、ところどころ塗装もはげ、少しサビも出ていました。

脚をバネのようにググーンと伸ばしてみましたが、もう誰もふり向きませんでした。

「さあさあ、ジェットくんとのあいさつはこれくらいにして、みんなツリーの飾りつけをしないと、クリスマスまでに間に合いませんよ」

孤児たちの優しいお母さん、副院長先生が、もみの木を指さしました。

「ジェットくん、この飾りつけてくれる？」

「もちろんだよ」

ある男の子が聞くと、ジェットくんはすぐさま飾りを手に取って、ジェット噴射で飛びあがりました。

ジェットくんがとっても高い枝に飾りをつけてくれたので、男の子は大喜びです。

それを見ていた他の子たちも、僕も私もとジェットくんの前に並びました。

ガンちゃんの前には、誰も並びません。

ガンちゃんがガッカリしていると、院長先生と副院長先生が、建物の中で話をしているのが聞こえてきました。

「やっぱりうちには、ロボットを二体も置いておく余裕はないよなあ」

「ええ。ただ子供たちにとって、ガンちゃんは大切なお友達ですから。困りましたねえ」

前に働いていた工場から追い出された時のことを思い出して、ガンちゃんは少し悲しくなりました。

「ボクハ ココデモ モウ ヒツヨウ ナクナッタ ノカナ……」

突然、もみの木の前で、小さい男の子がダダをこねて泣き出しました。

「なんでピカるのなの？ ピカピカってするのがいい！」

どうやら孤児院のクリスマスツリーに、まったく電飾がないのがイヤだと言っているようです。

世の中のいたるところで、クリスマスのために飾られたイルミネーションがピカピカと点滅していましたので、きっとどこかでそれを見かけたのでしょう。

この子がそれを羨ましがるのは、無理ありませんでした。

でも孤児院には、クリスマスツリーの電飾を買えるだけの余裕はありません。

ジェットくんが、男の子の気をそらしてご機嫌を取ろうとしますが、思うようにいきません。

結局、お兄さんやお姉さんになだめられて、いつの間にか小さい男の子は泣きながら眠ってしまいました。

その一部始終を見ていたガンちゃんは、ツリーを見あげました。

「ピカピカ スルノ カ……」

夜の街は、クリスマスのイルミネーションでいっぱいでした。

青いもの、白いもの、緑に赤。

様々な色の光のこう水が、いたる所からあふれ出して、まるで豊かさを競い合っているかのようです。

ガンちゃんはクリスマスツリーに飾る電飾を探して、ジャンク屋を回りました。

中古の電飾がたくさんありました。

でも、ポンコツロボットのガンちゃんが持ち合わせのお金など、まったくありません。

どうしようかと、ガンちゃんが困りはてていると、ジャンク屋のおじさんが声をかけてきました。

「どうだい、君のその左腕一本とこの白い電飾を、交換してやろうじゃないか？」

それを聞いたガンちゃんは、電飾が手に入るのならばと、喜んで自分の左腕をはずしました。

左腕が無くなって、ちょっと不便になりましたが、まだ右腕が残っているから大丈夫です。ツリーの飾りつけだって出来ます。

次の日、孤児院のクリスマスツリーには、白い電飾がピカピカと光っていました。

「きっと、どなたかご近所の優しい方が、お古を譲ってくださったのだわ」

「そうだね、ありがたいね」

先生たちはツリーを見あげて、見知らぬ贈り主に感謝しました。

ロボットのガンちゃんが、この電飾の贈り主だなんて、まさか夢にも思わなかったのです。

残念ながら先生たちは、片腕を失ったガンちゃんに、気づくことはありませんでした。

「わあ！ キレイ！」

ダダをこねていた小さい男の子は、ツリーを見あげて目を輝かせました。

「でも、なんで白いのだけなの？ あたし、赤が好きなのに」

そばにいた小さな女の子が、つまらなさそうに言います。

「ぜいたくを言っちゃいけないよ。これだけでも充分キレイじゃないの」

年長の子に注意されると、その女の子はふくれっ面ですねてしまいました。

ジェットくんが、なだめようとしますが、やっぱり駄目でした。

ガンちゃんは、ふたたびツリーを見あげました。

「アカ ガ スキ ナノカ……」

その夜、ガンちゃんはジャンク屋のおじさんに相談しました。

「アカイノ ガ ホシイノ デスガ」

「じゃあ、お前さんの左耳と交換しようじゃないか」

それを聞いたガンちゃんは、赤い電飾が手に入るならばと、よろこんで自分の左耳を差し出しました。

また、ちょっと不便になりましたが、これくらい大丈夫です。片方でも、じゅうぶん子供たちの声は聞こえますから。

翌日、白に赤が加わって、クリスマスツリーはとてもキレイに輝いていました。

「いったい、どなたなんでしょう？」

「きっと、とても優しくて子供が大好きな方だよ」

先生たちは、今度も片耳を失ったガンちゃんに気がつきませんでした。

電飾の贈り主は、近所の優しい人だと信じ切っています。

「ほら！ やっぱり赤があったほうがステキじゃない」

ふくれっ面していた女の子は、クリスマスツリーを見あげて満足そうに笑いました。

「ボクは青がいい」

「アタシは緑が好きなの」

「いろんな色が混ざったのがいいな」

「てっぺんに、大きなお星さまの飾りが欲しいな」

子供たちは、あたりをさっそうと飛び回るジェットくんさえ目もくれず、左腕と左耳を失ったガンちゃんにも気づきもしないで、ピカピカと光り輝くクリスマスツリーに、夢中になっていました。

片腕、片耳のガンちゃんが、クリスマスツリーを見あげます。

「アオ ミドリ イロンナイロ オオキナ オホシサマ カ……」

ガンちゃんは、その夜もジャンク屋に出かけました。

そして、並べてあるクリスマスツリーの電飾を全部くださいと伝えました。

ジャンク屋のおじさんは戸惑った顔をしました。

「もちろん構わないが、君の残った右腕と右耳、両目と両脚、それと声をもらうことになるが、それでもいいのかな？」

さあ、困りました。

もう子供たちの笑顔を見ることも、楽し気に笑う声を聞くことも、もみの木の高い枝に飾りをつり下げてあげることも、そしてお話をすることも、すべて出来なくなってしまふのです。

それはガンちゃんにとって、とても辛いことでした。

でも、どのみち自分は孤児院から出て行かねばならない身です。

ガンちゃんは、最後に子供たちを喜ばせたい一心で、首を縦に振ってしまいました。

「そうかい。じゃあ残った君の身体は電飾と一緒に、孤児院に届けてあげよう」

「アノ モウヒトツダケ オネガイガ アルノ デスガ……」

ガンちゃんの、その最後の願いを聞いたあと、ジャンク屋のおじさんは少しあわれむような目をして、小さくうなずきました。

「わかったよ。君との約束は、きっと守ろう」

その次の日は、クリスマス・イヴでした。

ジャンク屋のおじさんは孤児院をおとずれると、青や緑など、いろいろな色の電飾をクリスマスツリーに飾りつけました。

院長先生が、びっくりして聞きました。

「この飾りは、いったいどなたからの贈り物でしょうか？」

「とても美しい心の持ち主からさ」

そう言うと、ジャンク屋のおじさんは大きな星をひとつ取り出しました。

はしごを登って、クリスマスツリーのてっぺんに乗せます。

すると、そのピカピカの大きな星が光りはじめ、クリスマスツリーのてっぺんから子供たちを照らし出しました。

まだ昼間だというのに、それはとてもまぶしいくらいの光でした。

「先生、ガンちゃんがないんです」

年長の子が、心配そうな顔で探しまわっていました。

「え？ いつからいないの？」

副院長先生があたりを見回しますが、たしかにガンちゃんが見当たりません。

「たぶん、昨日の夜から」

「そうなの？ たいへん、みんなで探しましょう」

そう言った副院長先生の肩に、ジャンク屋のおじさんが手をかけました。

「探しても見つかりませんよ」

「え？ どうしてですか？」

ジャンク屋のおじさんが、クリスマスツリーのてっぺんで輝いている大きな星を指差しました。

「ガンちゃんは、あそこですから」

わけが分からずに、先生と子供たちは顔を見合わせました。

ジャンク屋のおじさんが、すべてを話しました。

両目、両耳、両手脚を失なったガンちゃんは、残った身体を星の飾り物に作り変えてくれるように、ジャンク屋のおじさんに頼んだのでした。

「ガンちゃんは僕たちのために、身体をバラバラにして売ったんだ」

「ぼくがピカるのほしいなんて言ったから」

「あたしも赤いのが好きだって言った」

「ボクは青がいいって言った」

「アタシは緑って……」

子供たちはみんな、光り輝くクリスマスツリーの下に集まって、星になったガンちゃんを見あげました。

「きっと、私たちの話も聞いてしまったのね」

「そうだね。ああ、なんて可哀想なことをしてしまったんだろう……」

先生たちも、ツリーを見あげます。

「ごめんね、ガンちゃん」

「ガンちゃん、ごめんなさい」

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

子供たちは大切な友達を失ったことを、とても悲しみました。

誰もがみんな、大声をあげて泣いています。

するとガンちゃんのお星さまが、クリスマスツリーの大きな影の中に向かって、一段とまばゆい光を放ちました。

影の中にボンヤリと、映像が浮かびあがります。

それは、ガンちゃんの姿でした。

「ガンちゃん！」

子供たちはかけよって、ガンちゃんに抱きつこうとしました。

しかし、差し伸べられた子供たちの手はすべて、ガンちゃんの身体をすり抜けてしまいます。

なおさらに悲しさが増して、子供たちも先生たちもみんな、思わずその場に泣き崩れてしまいました。

「ねえ、泣かないで、って言ってるよ」

ジェットくんが、みんなに向かって言いました。

「みんな大好きだよ、どうか泣かないで、って言ってるよ」

ロボットのジェットくんは、どうやら星になったガンちゃんと、気持ちが通じ合えるようでした。

映像のガンちゃんは、いつものように優しい目で、みんなをじっと見つめています。

ジェットくんが続けます。

「ボクの身体はもうボロボロだったんだ。このまま壊れてスクラップになるよりも、ボクはこうやってお星さまに生まれ変わることにしたんだ」

ガンちゃんはお星さまになって、クリスマスツリーのてっぺんから、みんなを見守ることにしたと言うのです。

「だから、みんな悲しまないで。みんなが泣くと、ボクも悲しい……」

「あ！」

「どうしたの？」

「ガンちゃん?!」

ガンちゃんの映像を映し出していた光が、だんだん弱くなってきました。じょじょに、ガンちゃんの映像が薄れていきます。

「バッテリーが切れたんだ」

ジャンク屋のおじさんが言いました。

「ガンちゃんは、どうなるの？」

子供たちが聞きます。

「もうすぐデータがすべて消えてしまうだろう。これが最期だよ」

「いやだ！ 消えないでよ、ガンちゃん！」

「ガンちゃん、消えちゃ、やだよ！」

「お願い……ガンちゃん……」

「ガンちゃーん！」

みんなが見守る中、ついに光が完全に消え去りました。ガンちゃんの映像も二度と映ることはありませんでした。

みんな、どうしていいのかわからずに、泣きべそで身体を震わせています。

「みんな、聞いて。ガンちゃんの、最期の言葉だよ」

ジェットくんが、静かに話し始めました。

「ボクは、この場所が大好きだったんだ。だって、クリスマスツリーに飾られた、みんなのステキな夢をいっぱい見られるんだもの。これからは、いつでもボクはここにいるよ。楽しい時も、うれしい時も、悲しい時も、さびしい時も、必ずみんなを見守っているよ。そして、みんながクリスマスツリーに飾った夢を叶えるのを、ボクは楽しみに待っている。だからどうか、悲しまないで笑ってください。ボクには、ここにいるみんな、ひとりひとりの笑顔が、とっても、とっても、大切な宝物なんだから」

それを聞いた子供たちが、クリスマスツリーのてっぺんに向かって叫びました。

「わかったよ、ガンちゃん。ぼく、泣かないよ！」

「わたしも、泣かない！」

「ボクも！」

「アタシも！」

子供たちは涙のあふれる目を、両手の甲で一生懸命にぬぐいながら、必死に笑顔を作ろうとしました。

「だって……、だって、ガンちゃんのお星さまが、いつもここで見ていてくれるんだもんね」

「そうだよ、一緒にいてくれるんだもん。さびしくなんかないよ……さびしくなんか……」

「ボク、ぜったいに夢を叶えて見せるからね、見ていて！」

そう言いながらも、子供たちはみんな涙が止まらずに、しゃくりあげています。

「そうだ、みんなで歌を歌おうよ！ ガンちゃんのお星さまの歌。キラキラ星の歌」

「うん、歌おう！」

「歌おう！」

副院長先生が、オルガンで伴奏を弾きはじめました。

きらきらひかる おそらのほしよ

まばたきしては みんなをみてる

きらきらひかる おそらのほしよ

子供たちはベソをかきながらも、オルガンに合わせて、とても元気よく大きな声で歌いました。

ガンちゃんのお星さまは、様々な色の電飾が光り輝くクリスマスツリーのてっぺんで、それにじっと聴き入っているようでした。

きらきらひかる おそらのほしよ

みんなのうたが とどくといいな

きらきらひかる おそらのほしよ

歌が終わると、ジャンク屋のおじさんが拍手をしてくれました。

みんなに、ようやくいつもの笑顔が戻りました。

「さあ、あそこでガンちゃんが見ているよ。みんな、しっかりとクリスマスの準備をしようね」

院長先生が、クリスマスツリーのてっぺんを指差して言いました。

「はい！」

子供たちは、いつも通りに元気よく大きな返事をする、さっそく飾りつけの続きに取りかかりました。

「それでは私もこれで失礼します。みなさん、メリークリスマス！」

ジャンク屋のおじさんが、そこにいるみんなに別れを告げて、帰っていきました。

さて、それからクリスマス・イヴの準備も順調にすすみ、午後も、もう日がだいぶ傾いてきた頃でした。

「あっ、雪だ！」

ひとりの男の子が叫びました。

「ほんとだ、雪だ！」

子供たちは、この冬初めての雪に、はしゃぎ始めました。

ジェットくんのピカピカの頭にも、フワリフワリと綿雪が落ちてきます。

頭に落ちた雪は溶けて水になり、おでこをそっと伝って、目のくぼみに溜まりました

。

するとどうでしょう、ジェット君の目に溜まったその水が、まるで涙のように筋を引いて、一気に頬を流れ落ちたのです。

「どうしたの、ジェットくん？ 泣いちゃダメよ。ね、笑って。ガンちゃんのお星さまと約束したでしょ？」

小さな女の子が、指先でジェットくんの涙をぬぐって、笑いかけました。

「うん、そうだね。ありがとう」

ジェットくんは、ガンちゃんのお星さまを見あげて、女の子と一緒に手を振りました

。

それから二人仲良く手をつなぎ、建物の中へと入って行きました。

日も、とっぴりと暮れました。

外は雪が、しんしんと降り続いています。

庭にうっすら降り積もった雪に、孤児院の窓からもれた明かりが、窓枠の形通りに四角く映っています。

時おり窓の中からは、子供たちと先生方の笑い声が聞こえてきます。

その窓から見える暖炉の前のテーブルでは、とんがり帽子をかぶった子供たちが、イヴの夜のささやかなごちそうを口にして、にっこりと微笑んでいました。

こじんまりとした部屋の中はとても明るくて暖かく、手作りのクリスマスの飾りとともに、子供たちが描いた絵が壁いちめんにはられています。

絵の中に描かれていたのはどれも、ロボットのガンちゃんとの思い出ばかりでした。

どの絵のガンちゃんも優しく微笑んでいて、子供たちと手をつないでいます。

大きなもみの木は、その枝に積もった綿雪で、真っ白に飾られました。

たくさんのカラフルな電飾が、枝からぶら下がった子供たちの夢を、その白い背景に鮮やかに浮き立たせています。

クリスマスツリーのてっぺんでは、ガンちゃんのお星さまが、様々な色の電飾の光を反射して、子供たちを優しく見守るように輝いていました。

おしまい。